昭和45年創刊　平成26年12月1日発行（毎月一回一日発行）俳句雑誌　沖　第45巻第12号

沖

俳句雑誌［おき］

12月号

沖　発行所

栗名月

能村　研三

くゆり立つ秋の蚊遣を折りて消す

栗名月動く歩道に身を委ね

菊月や小鍋に添なす砂時計

遠くまで見むと高きに登るなり

六十五歳

私は十二月が誕生日なので、間もなく六十五歳を迎える。国の高齢者の定義から言えば、この年から「高齢者」ということになる。年金の支給開始やＪＲのジパングや航空券のシニア割引もその対象となる。近年は平均寿命がどんどん伸びていることから、高齢者の捉え方も変化しつつあるが、俳句の世界では六十五歳はまだまだ若僧でしかない。俳人協会の会員の平均年齢が七十五歳というから私はそれを少しでも引き下げるお手伝いをしていることになる。

先師登四郎の六十五歳の頃というと「沖」が創刊されて五年目を迎え胃潰瘍を患って入退院を繰り返しながらも市川学園での教職は続け、多くの俳句作品や論文を執筆するなど充実期にあった。第五句集『幻山水』第六句集『有為の山』など三年毎に刊行するなど意欲も満々であった。

PDF= 俳誌の salon

割石榴その見目よきを画材とす

細やかに鍬を振るはせ秋収め

貝の口結ひ半纏の荒神輿

秋惜しむ洋庭園の対称美

一島を被り余して鰯雲

木守柿汝は選抜か居残りか

ただ母が大病を患いその心労を抱えながら仕事に向かっていたのである。母は脳腫瘍という大病を患い七年間の療養生活にあったが、六十四歳で亡くなった。私もその母の年齢は越えられたことになるが、六十五歳という大きな節目を迎えることから健康には気をつけていきたいと思っている。

この三月で公務の仕事を全て終了し、いくらかは自由な時間が取れるかと思ったが、中々そうはいかないようで多忙を極める毎日である。

間もなく長年仕事が停滞していた俳人協会の自註句集も刊行されることになり、今年の暮れまでには第七句集も纏めて来年には刊行したいと考えている。

来たるべき平成二十七年は「沖」の創刊四十五周年の年であるので、六十五歳のわが身に鞭打って一層励んでいきたいと思っている。

能村　研三

PDF= 俳誌の salon

蒼茫集

立つといふ　酒本八重

立つといふ意識の目覚め天高し
花野より瑞の篠笛聞えくる
登高や名ばかりの丘に佇つ吾は
洗ふほど太る大根農や佳し
石蕗やつよくやさしい杖欲しと
老齢は舌足らずなり冬の鵙

香時計　田所節子

繊月や稜線青く重ね合ひ
蔀戸をあげて色なき風入るる
香時計てふ露けさの盛枡目
秋気澄む宇津の谷峠の石畳
軒に吊る十団子は数珠雁渡し
団地祭まづ大臼を据ゑにけり

白世界　千田敬

出格子に透くる彫師や秋の暮
硯洗ふ指の腹てふ眼を借りて
月蝕や古酒の封切る佳き日なり
病みて得し白の時間や衣被
鶏頭を見て観て視てもまだ見てる
断崖の分かつ秋濤白世界

礁しぶき　久染康子

秋爽富士礁しぶきを台座とし
段畑の夕日が捉ふ隠れ柚子
遠富士の裾野を洗ふ秋の潮
木守柿色に貫禄出でにけり
ひと手間で片付く出店在まつり
詫び事へ色なき風に背を押され

PDF= 俳誌の salon

耳飾り　頓所友枝

職業欄空白のまま鰡飛ぶや
耳飾りはづしてよりの新走り
新宿は人湧くところ秋日濃し
穐田の余力青あを旅半ば
青空のはち切れさうな台風過
種採つても少し未来信じたし

やがては無　北川英子

捜索隊解散の山鳥渡る
竜淵に潜み月蝕始まれり
紅葉山燃え盛りをりやがては無
許さるるごとく身に沁み舌下錠
阪神の勝ちし勝ちしと松茸飯
逝くよりも逝かるる怖れ秋の暮

釣瓶落し　遠藤真砂明

小鳥来る隠れ湊の潮鳴りに
魚影一瞬鶺鴒の嘴にあり
大いなるしじまの釣瓶落しかな
子の釣りし小烏賊ばかりの吊し干し
地球どよもし台風の灘走り
破れ尽くして海風の大芭蕉

クイックターン　千田百里

掃除機のクイックターン小鳥来る
コスモスの揺るるよ昼酒の効くよ
字津谷の細道秋の過客われ
十団子を振りなば爽籟に叶ふ
ハンドルのあそび大切秋興も
火祭を見るに宵寝といふ備へ

秋寂び　楠原幹子

なんとも武骨白桃の種であり
とんぼ湧く夕空過去とも未来とも
桐一葉更地となれば小さくて
旧道のすなはち曼珠沙華通り
箱枕いろとりどりの秋もやう
皆既月食秋寂びの色とこそ

己が治癒力　甲州千草

農協の大樹のびやか朝の鵙
いい空にいい大根の干されあり
唐辛子己が治癒力信じゐる
椅子の下ぽつかり暗し金木犀
山粧ふ座せばするりと日の逃げて
黄昏の音の重なり木の実落つ

PDF= 俳誌の salon

秋へ　辻美奈子

雁渡し海原は日を懐胎す
秋思ふと天保の世の梁に触れ
大旅籠出でて秋暑の世なりけり
秋の富士少しおつとりしてゐたり
コスモスや潮風のまだ届く駅
新幹線ふはりと動き出す秋へ

秋の滝　高橋あさの

小鳥来て乾いてをりぬ外流し
寒露かな牛乳の膜吹きくぼめ
裏みちの親しさ抜ける十三夜
舌頭に先師の句あり曼珠沙華
秋冷の湖は木霊を引き寄する
しらじらと雑念もなし秋の滝

山霊　藤森すみれ

杣山も己れつくして紅葉せり
手の中に木の実の力ひしめけり
山さびの色に夕日の吾亦紅
わが畑の野沢菜八ヶ岳の風まねき
山霊に応へ木の実の降ることよ
零点は奮気の数よ鶏頭花

白色　望月晴美

篝火に水も燃え立つ鵜飼かな
白色は原点ならむ障子貼る
み仏に澄む水をもて仕へけり
庭のもの供華に加へて秋彼岸
虫の夜や己を燃やす一行詩
どしや降りのあと透明な十三夜

木遁　秋葉雅治

木の間隠れの術もありけり松手入
竹伐つて天に小さな解放区
幼きか一羽遅れて鳥渡る
石庭も念仏堂も秋ついり
雲掴むやうに掬はれ新豆腐
冷まじや月を蝕む星に棲み

御子抱くマリア　荒井千佐代

南天の青き実海光真上より
鷹渡り了ふや秀野の忌と思ふ
塾の子の揃ひて帰る良夜かな
ははに似し一と世授かり茨の実
死にに行く猫かカンナの一本道
秋霖や御子抱くマリア立ちしまま

PDF= 俳誌の salon

地上絵　森岡正作

地上絵の一筆稲を刈り始む
喝采を浴び喝采の曼珠沙華
一日野に暮れ極上の猿酒
旧家ほど廃れゆくもの鵙の贄
秋桜波乱は胸の内にあり
頂に一つ飛び火の櫨紅葉

仲間割れ　菅谷たけし

穐田の轍一撲の名残めく
破蓮の風にはじまる仲間割れ
木染月トンネルで越す宇津の山
萩叢や竹筒で聴く水の音
厨子小さく持仏小さし新松子
灯台を残して燕帰りけり

位あり　柴崎英子

菊に黄花あり黒松に位あり
運動会追へば大玉大回り
秋思ふつ切る階段を二段飛び
口開いて秋冷いたる埴輪かな
熱柿啜る人間といふ不確かさ
土蜘蛛の糸月光を降らしけり

野面積　宮内とし子

寺裏は浄土か曼珠沙華日和
身に入むや旅籠の小さき急階段
菊月の両手に包む志野茶碗
木杓子に掬へば逃げるとろろ汁
雁渡しワインの蔵の十四度
穴まどひ隙間だらけの野面積

十団子　吉田政江

宇津の谷の秋風を来て十団子
姿見橋秋思を映す今小町
爽涼の旅籠に小さき宿枕
紙そろばんに萬の桁ありとろろ汁
秋興や蒔絵のくもる香時計
誰の手ももう及ばざり烏瓜

月光　大川ゆかり

秋暑しだまし絵の水逆流す
張りつめてゆける夜空や月昇る
月光やふつふつ鳴けるもろみ樽
花束に秋思のかほを埋めけり
烏瓜残火のごとく点りたる
うつし世の濁祓ふごと鹿の声

PDF= 俳誌の salon

潮鳴集

銀の芒

加藤富美子

師の句碑へ紅葉旦つ散る中をゆく
銀の芒手招く憂国忌
十月桜万燈に魁けり
真砂女恋ふ小粒の芋の煮ころがし
実紫昔はありし姦通罪

竹の春

矢崎すみ子

木洩れ日は夢のゆりかご竹の春
けふの風けふの光の秋桜
走り根に樹海の歴史秋の富士
十団子数へて風の白さかな
ふるさとに釣瓶落しの日を惜しむ

しやらん

内山花葉

山巓は雲生むところ月見草
笑窪あるむかしの硝子新松子
掌にしやらんと冷ゆる十団子
大戸撥ね上げ秋天を広げけり
健脚しのぶ萩宿の急階段

手応へ

町山公孝

初汐やルネッサンスといふちから
駿河路や青蜜柑また青蜜柑
アルハンブラ今にも柘榴はじけさう
淡々と黙々と生き蕎麦の花
竹竿の先の手応へ柚子の数

酔余

荒井千瑳子

鳥渡る長城土にもどりゆき
秋澄めり絵馬に軽重ある願ひ
鰡飛んで水切り石のごと消ゆる
身の秋や酔余に芸の一つなき
したたかに時を奪ひて台風来

PDF= 俳誌の salon

沖作品

能村研三　選

爽籟や桑の木たかき農学部　千葉　多田　文子

まんじゆさげはるかな時へ蘂を張り

かなかなや波の形の箸枕

掌に馴染むひとつを選りぬ榠樝の実

秋深し絡みあうたる蔓とつる

鶏頭花原始の色に咲いてをり　神奈川　神山　節子

御手洗に水の涸れゐる厄日かな

秋桜空の広さに吹かれをり

トンネルを出る度秋の迫りくる

水音と金木犀に目覚めけり

どの山も神住みてをりイオマンテ　アメリカ ロースカロライナ　鈴木　一広

波音も何時しか夢の菊枕

空高し誰もが背伸びしたくなり

敗者には明日の夢あり新松子

赤とんぼどこかで歌声聞えけり

万の虫真夜の虚空へ歌ひ出す　千葉　小河原清江

バンドネオン風を孕みて吐く秋思

朝顔の白き項にある未来

灯点し頃樹々に磁場あり椋鳥の群

引幕の襞に妖気や夏芝居

風の韻結びて花野暮れにけり　東京　平松うさぎ

半跏像の指と頬の間秋愁ひ

草原に白露の声の澄みゆけり

豊の秋あられに切つてラタトゥイユ

路地夕日燻して秋刀魚焼きにけり

葛飾のむかしも今も水澄めり　礒貝　尚孝

つくづくと古人の心けふの月

カステラの小箱が二つ敬老日

些かの血気は吾にも曼珠沙華

岡部宿の秋を深めて釣瓶井戸

PDF= 俳誌の salon

沖作品15句選評

*

能村研三

まんじゆさげはるかな時へ蘂を張り　多田　文子

曼珠沙華は別名が彼岸花、死人花と呼ばれて忌み嫌われることが多いが、俳人だけは別のようだ。真っ赤に大きな蘂を張り、活き活きと咲き誇る曼珠沙華は、見る人の心を一瞬引き締まる程に燃え立たせて咲く。開いたその花は花弁が大きく弧を描いて反り返り、長い蕊は一本一本が思い切り外へ伸びつつ、空へ向かって湾曲している。この妖艶な美しさに加えてみずみずしい生きた花の感触は、はるかな時に向かって蘂を張っているようでもある。ここには自然の持つ強い力に押し広げられて咲く強い意志が感じられる。

鶏頭花原始の色に咲いてをり　神山　節子

鶏頭花は韓藍〈からあゐ〉の名前で万葉集にも詠まれている。「秋さらば写しもせむとわが蒔きし韓藍の花を誰か摘みけむ」おそらくは、中国、韓国を通じて日本に伝わった花のようだが、たくましい茎の上に妖艶な深紅の花を咲かせる鶏頭は、昔から日本の人に親しまれていた。そして古歌でうたわれるように花弁が赤色系の染料にも使われるなど、原始の代から日本人の心に響く色なのだろう。

空高し誰もが背伸びしたくなり　鈴木　一広

秋の空は空気が澄んでいて、緩やかに糸を引く雲や羊の群れのような雲があり見ていても楽しい。秋の空でしか感じられない空間の広がりで、思わず背伸びして手を伸ばしてしまいそうな感じである。ゆったりと流れていく風の動きを感じるようで、ふんわりとした光に包まれて心が落ち着く。

朝顔の白き項にある未来　小河原清江

朝顔の花には赤、ピンク、白、藍といろいろあるが、何といっても一番目を引くのは深みのある群青色のもの。正面からみると真ん中は群青との対比も美しい白で花の中心に吸い込まれてしまいそうになる。しかしこの句は後ろから朝顔を見たのだろう。白いうなじの朝顔は清楚で涼やかで、若い女性の色の白い、細い「うなじ」を感じさせる。

風の韻結びて花野暮れにけり　平松うさぎ

秋の草花が乱れ咲く花野。朝露が降り、霧に濡れ、秋の日射しを浴びる。春や夏の花が咲き乱れる野原とは違い、花野は寂しさ、あわれさも感じる。花々は澄んだ光のなかで揺れ、明るく広大な野には寂しい秋の風が吹き渡っていく。その様子が「風の韻結びて」に表現されている。（以下略）

PDF= 俳誌の salon